

MUSEUM

ミュージアム・アイズ

EYES

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

Vol. 65
2015

特集

内藤家文書研究の促進及び 旧領延岡市との交流事業

Contents

- 展示&リサーチ — 学芸員養成課程選択科目(博物館学特説Ⅱ)の村絵図展示
- 学芸研究室から — 後期旧石器時代の黒曜石利用と中部高地黒曜石原産地の土地利用(1)
- 市民レクチャー — 土器が語る農耕の開始—明治大学博物館収蔵資料のレプリカ法調査—
- 博物館活動報告 — 失われた街が語りかけるもの～リアス・アーク美術館 東日本大震災と津波の記録～
第2回全国大学史展「学生たちの戦前・戦中・戦後」
公開講座考古学ゼミナール
- 収蔵室から — 陶磁器人形—瀬戸ノベルティ
- 南山大学協定通信 / 図書館通信 / 常設展示の改修
- 博物館入館者の動き / 団体見学の記録 / M2カタログ / 博物館友の会から

特集

内藤家文書研究の促進及び 旧領延岡市との交流事業

日比 佳代子 (刑事部門学芸員)

明治大学博物館では、江戸時代の大名内藤家に伝来した文書—内藤家文書—を所蔵しています。内藤家は、上総国佐貫(現・千葉県)、陸奥国磐城平(現・福島県)、日向国延岡(現・宮崎県)を藩領とした譜代大名です。内藤家文書には、佐貫藩時代(～1622年)の記録は殆ど残されておらず、磐城平藩時代(1622～1747年)、延岡藩時代(1747～1871年)の記録や、明治以降の旧藩主家の記録によって構成されています。内藤家文書は、単に大名家の記録というのではなく、藩政の事、地域社会の人々との関係などについての記録でもあり、これまでも内藤家文書から多くの研究成果が生み出さ

れてきました。また、学術的な利用はもちろんですが、旧内藤藩領の人々にとっては、地元の歴史を知る為に内藤家文書の存在は欠かせません。明治大学博物館では、内藤家文書の展覧会や講演会などを通じて、これまで旧内藤藩領の宮崎県延岡市と交流をもって来ました。明治大学博物館では、内藤家文書のさらなる研究利用促進と、内藤家の旧領である宮崎県や延岡市へ研究成果を還元するという取組みを通じた社会連携の充実を目指して、2011～2015年度に「内藤家文書研究の促進及び旧領延岡市との交流事業」を行う事にしました。内容は交流事業と研究促進の二本立てです。一つ目の【交流事業】は、内藤家文書を素材として明治大学関係者が出前授業や講演会などを行うアウトリーチ活動、宮崎県の高校生、延岡市の小中学校生を対象とした作文コンテストです(期間2011～2013年度)。二つ目の【研究促進事業】は、当該分野の研究者や関係機関に協力を要請して行内藤家文書の調査・研究です(期間2011～2015年度)。

交流事業

2011～2013年度に実施した作文コンテストでは、宮崎県下の高校生、延岡市下の小中学校生を対象に、次のように呼びかけました。

東京の明治大学博物館に宮崎県の歴史に深くかかわるたくさんの古文書があるのを知っていますか。博物館ではそれらの古文書から分かった様々な歴史を、講演会活動などを通じて皆さんにお伝えしてきました。今度はみなさんが地域の歴史をしらべて、私たちに教えてくれませんか。あなたの住んでいるところにはどのような歴史がありますか。あなたはその歴史をどんな風に感じていますか。あなたの『ふるさと歴史自慢』を待っています。

この呼びかけに、3年間でのべ295名の高校生・小中学生が、宮崎県の歴史、延岡市の歴史を調べて作文を送ってくれました。内藤藩に関する話はもちろんの事、神楽などの地域のお祭り、地域の発展に尽力した人々の事、はては地域に伝わる棒術(棒を武器とする武術)の事まで、作文の内

明治大学博物館 主催
明治大学で
宮崎の歴史を学ぼう
作文コンテスト

◆テーマ 「私のふるさと歴史自慢」
東京の明治大学博物館に、宮崎県の歴史に深くかかわるたくさんの古文書があるのを知っていますか。博物館ではそれらの古文書から分かった様々な歴史を、講演会活動などを通じて皆さんにお伝えしてきました。今度はみなさんが地域の歴史をしらべて、私たちに教えてくれませんか。あなたの住んでいるところにはどのような歴史がありますか。あなたはその歴史をどんな風に感じていますか。あなたの『ふるさと歴史自慢』を待っています。

◆募集要項
1. 応募資格 ①宮崎県延岡市内の小学生・中学生
②宮崎県内の高校生
2. 応募方法 ①応募用紙(別紙)に氏名、フリの漢字、学年、住所を記入して下さい。
②応募作品は、未発表のものに限ります。応募作品は返戻しません。
③応募作品は郵送で提出して下さい。
3. 応募期間 2012年5月1日(土)～5月31日(土)まで
①小学生・中学生は郵送で提出して下さい。
②高校生は、〒113-0032 東京都千代田区神田神保町1-1-1 明治大学博物館(本館)へ直接提出して下さい。5月31日締め切り。

◆各賞 賞状 優秀賞 1名、入賞 1名、佳作 2名
小学生 優秀賞 1名、入賞 1名、佳作 2名
中学生 優秀賞 1名、入賞 1名、佳作 2名
高校生 優秀賞 1名、入賞 1名、佳作 2名
副賞として、優秀賞・入賞の名を5月1～3日に東京へご招待(8月1～3日は明治大学で本学関係者を対象としたツアー)が実施されていますので、明治大学の魅力を満喫して下さい。佳作には500円分の図書カードが贈られます。作文が発表されている場合は、8月2日に明治大学博物館で行われる中で、作文が発表されている方です。
※応募作品は明治大学で公開させていただきます。掲載料はかかりません。なお、原稿料、及び賞品の手配などは別途お問い合わせください。

◆発表 明治大学博物館にて審査を行い、各賞受賞者は2012年6月20日(土)に明治大学博物館にて表彰を行います。

問い合わせ先
明治大学博物館
〒113-0032 東京都千代田区神田神保町1-1 アカザキ・コムンテ地階
電話: 03-2260-4448 FAX: 03-2260-4365
URL: <http://www.meiji.ac.jp/museum>

作文コンテストのチラシ

容は宮崎県や延岡市の豊かな歴史を私たちに教えてくれました。

明治大学博物館では、〈自分の体験を通じて、地域の歴史的な魅力を自分の言葉で表現していること〉を選考のポイントとし、多くの作品の中から優秀賞、入選、佳作を選びました。宮崎県の高校生、延岡市の小中学校生を明治大学で行う授賞式に招待し、内藤家文書を収蔵している明治大学や明治大学博物館を知ってもらうという事もこの交流事業の重要な柱の一つでしたから、優秀賞と入選を獲得した高校生、小中学校生を明治大学博物館で行う授賞式に招待しました（授賞式は、明治大学の事をよく知ってもらえる様にと、明治大学でホームカミングデーやオープンキャンパスなどを行っている時期に合わせて開催しました）。

授賞式に出席するために宮崎県や延岡市からやってきた高校生、小中学校生、その保護者には、授賞式の前に博物館を案内して、内藤家文書などの収蔵品を実際に見てもらう機会を設けました。内藤家文書の見学では、内藤藩の日記や、藩士の由緒を書き留めた記録、江戸時代の宮崎市や延岡市周辺を描いた絵図などを見学し、宮崎県下の歴史が古文書という形で今に残されている事を知ってもらいました。授賞式では、内藤家文書の研究成果を還元する講演会を行った後に、賞状の授与を行い、優秀賞受賞者3名が皆の前で作



授賞式での風景

文を発表しました。3年間の作文コンテストを通じて、宮崎県下の高校生、延岡市下の小中学校生とともに豊かなやり取りをする事が出来ました。

また、内藤家文書を収蔵する明治大学で生まれた研究の成果を、内藤藩の旧領地域の人々に知ってもらう事を目的として、明治大学関係者と関係機関による講演会も行いました。交流事業を行った3年間に、延岡市での出前事業1回と延岡市と共催した講演会を6回（10講義）行い、内藤家文書研究の成果を市民に還元しました。

研究促進事業

近代の史料も含めれば約5万点と言われる内藤家文書にはたくさんの情報が含まれており、さまざまな切り口から研究を行う事が可能です。内藤家文書を素材とした研究では、『譜代藩の研究—譜代内藤藩の藩政と藩領—』（明治大学内藤家文書研究会編、八木書店、1972年）など、これまでも多くの研究成果があげられてきました。本年度が最終年度となる研究促進事業では、より一層の研究の促進を図るため、当該分野の研究者や関係機関に協力を要請して館蔵の内藤家文書の調査・研究を進めてきました。また、内藤藩の研究をするためには、内藤家文書は欠かせませんが、内藤藩の事を知るためには、内藤藩の藩士の家に伝わった史料や、旧内藤藩領の村人や町人の家に伝来した史料などもあわせて複合的な観点から研究を行う事が求められます。この点を踏まえて、明治大学博物館学芸員が他機関や個人が所蔵する内藤藩関係文書の所在調査も行ってきました。



延岡市内藤記念館共催講演会の風景

この研究促進事業を通じて、当該分野の研究者や関係機関が、芸能関係・幕長戦争関係などの重点テーマに関する内藤家文書の所在調査を、2014年度までに7回実施しました。その結果を踏まえて、重要史料の写真撮影・翻刻作業などを行い、これらの成果は、明治大学博物館の広報紙や明治大学博物館研究報告で発表され、明治大学博物館で講演会も行いました。また、博物館学芸員による他機関や個人が所蔵する内藤藩関係文書の調査では、いわき市、延岡市に存在する旧内藤家家臣の文書を調査し、写真撮影も行いました。また、九州大学が内藤家文書の筆写史料を所蔵している事や内藤藩の御用商人の史料を所蔵している事なども分かってきました。内藤家文書の筆写史料を九州大学が所蔵している理由については、次ページコラムにて、九州大学附属図書館記録資料館九州文化史資料部門の梶嶋政司氏から、そのいきさつを紹介してもらいます。

本年度終了する「内藤家文書研究の促進及び旧領延岡市との交流事業」は、以上の様なたくさんの成果を重ねてきました。この事業で得られた成果を今後の博物館活動に反映させ、収蔵資料の研究・教育機能の拡充、明治大学博物館の社会貢献・社会連携の拡充という博物館のミッションに繋げていきたいと考えています。

九州文化史研究所と内藤家文書

梶嶋 政司 (九州大学附属図書館記録資料館 九州文化史資料部門)

今日、九州大学記録資料館九州文化史資料部門に内藤家文書の謄写本が伝わっている(図版参照)。小稿では九州大学が所蔵する謄写本を紹介して、内藤家文書の歴史の一端を明らかにしよう。

九州文化史研究所

九州文化史資料部門は、その端緒を戦前期の九州文化史研究所に求めることが出来る。同研究所は、九州全般にわたる文化史的な史料の収集と研究を目的として、昭和9(1934)年、九州帝国大学法文学部のなかに設置された機関だった。

母体の九州帝国大学法文学部は、美濃部達吉が創立委員となって大正13(1924)年9月に創設された。法科と文科を融合した新しい法文学部は、1920年代前半に東北帝国大学と九州帝国大学に相次いで設置されたものだ。

大正15(1926)年11月の法文学部教授会で佐々弘雄教授は、「歴史上、文化の源泉地」との認識から九州地域の史料蒐集を提案しており、翌昭和2(1927)年4月には、国史学講座教授長沼賢海が「史料蒐集ニ関スル件」を法文学部教授会に提出した。設置まもない法文学部で、後の九州文化史研究所の活動を先取りする議論がすでにはじまっていたのである。これは、近代日本の学問史としても興味深い。

かくして昭和9(1934)年9月、九州文化史研究所が開所した。開設まもない九州文化史研究所では、長沼賢海(国史学)、三田村一郎(財政学)、金田平一郎(日本法制史)、遠藤正男(経済史)といった法文学部の教員たちが所員として調査研究に従事していた。

内藤家文書の調査

九州文化史研究所では草創期から九州各地の史料の採訪を行った。『採訪日記』昭和13年3月の記事を繙くと、「二十六日延岡内藤家に至り所蔵記録史料を拝見す、その中借用を願ひ後刻手続を了して借用することを約して帰る、同所にては家扶内藤貫太郎氏より種々高配を得たり」とある。このとき内

藤邸を訪ねたのは、法文学部の金田平一郎・遠藤正男両助教授だった。彼らは3月23日から同27日にかけて、南九州の史料調査に出かけていた。内藤家では家扶内藤貫太郎氏の高配を得て、文書を実見したうえ、借用の約束を取り付けている。

冒頭紹介した九大本はこのとき借用し謄写したものだ。同年9月から10月の間に謄写されている『日向白杵郡延岡領御公儀触書』、『内藤治部左衛門組宗門改先祖書』、『日向国諸縣宮崎郡村之様子大概書』、『高札之控』、『萬法度書』、『武家諸法度』、『町中掟書』、『諸御定書』、『郷中五人組前書』、『御條目並追加』、『公事批判帳』、『内藤家所蔵経済、人口並異国船警備資料』といった謄写本のタイトルから採訪した法制史家と経済史家の関心のありかたをうかがうことができる。

内藤家文書は、その後、昭和16年に東京渋谷の屋敷に移され、東京大学史料編纂所の調査が実施されている。九大の調査は文書が東京に移る直前、いまだ国元延岡にあった時期に行われた貴重な調査だったと言えるのである。

なお、九州文化史資料部門には延岡藩の史料として、高嶋家文書などがあり今後の研究が俟たれる。



九州大学所蔵 謄写本

収蔵室から

陶磁器人形 — 瀬戸ノベルティ



愛知県瀬戸市は日本を代表する窯業地である。その陶磁器産業の戦後復興を支え、高度経済成長期に生産の最盛期を迎えた要因の一つとして、陶磁器人形を中心とした「ノベルティ」の存在がある。しかしながら、1985年のプラザ合意後の輸出不振をきっかけにその生産は急速に衰退し、現在、その存在はあまり知られなくなった。昨年、瀬戸でノベルティ生産が開始され百年の節目を迎えたことから、その価値の見直しや研究が活発化してきている。今回はこの瀬戸の輸出産業を支えた「ノベルティ」の存在と歴史についてご紹介する。

「ノベルティ(Novelty)」という言葉は現在、一般に企業が広告媒体や景品広告として配布する廉価な小物や大衆向けの記念品などを指す言葉として使用されるが、もとは「新しく珍しいもの」を意味する言葉である。瀬戸では従来の伝統的な陶磁器に比べて目新しいという意味で、西洋の人物や文物、宗教をモチーフとした陶磁器の置物や飾り物を「ノベルティ」と呼んだ。ノベルティは置物に限らず装飾性に富んだ化粧道具や台所用品など、実用品が何万種類にも及ぶ。長らく一般用語ではなく関係者のみに流通する言葉であったが、平成25(2013)年に瀬戸陶磁器工業協同組合により「瀬戸ノベルティ」として商標登録された。

日本人にとって陶磁器の人形は馴染が薄いように感じられるが、西洋では17世紀頃に中国の明時代後期、徳化窯で作られるようになった白磁製人形が伝わったことから生産が始まった。18世紀にはマイセン(ドイツ)やセーヴル(フランス)で、当時流行したバロックやロココ調の貴族たちの生活様式を映した磁器人形「フィギュリン」が、宮殿への献上品や装飾品として作られ、次第にヨーロッパの富裕層に普及した。この後、新大陸アメリカに移住したヨーロッパ人の間で、フィギュリンを家庭に飾ることがステータスとなるが、ヨーロッパ製のフィギュリンは庶民には手の届かない高級品であった。

瀬戸でノベルティが生産される契機は、1914年の第一次大戦により、ドイツからアメリカへの磁器人形の供給が途絶えたことにある。当時、ニューヨークにあった総合商社「森村組」(現ノリタケ)はこれを好機ととらえ、日本においてより安価で良質な磁器人形を生産し、アメリカへ輸出することを計画した。瀬戸は既に江戸時代末期から続く磁器生産の完全分業化により量産の体制が出来上がっており、また、白色硬質磁器を生産す

ることに向けた良質粘土に恵まれていたことから、ノベルティの生産地として白羽の矢がたった。輸出当初は製法の容易な子供向けの玩具人形であったが、昭和初期には高級人形フィギュリンに近い高度な技術を要する人形の製造に成功し、ノベルティの輸出は一つのピークを迎えた。しかし、第二次大戦の日米開戦により、対米輸出を主軸としていたノベルティ生産は一度途絶える。アメリカ人による日本製ノベルティに対する評価は高く、戦後、進駐軍の帰国の手土産を中心とするノベルティ需要が生まれ、順調に復興を遂げた。

その後、日本の高度経済成長とともに、ノベルティの生産量、販売数ともに右肩上がりの発展を遂げ、ノベルティは洋食器とともに輸出の花形製品として名古屋港から北米を中心に世界中に輸出された。最盛期の1970年代には瀬戸製品の輸出比率の9割をノベルティが占め、1982年には瀬戸の陶磁器工場1249軒中、約5分の1がノベルティ工場であった。しかしながら、昭和60(1985)年のプラザ合意による急激な円高により、対米輸出は一気に減少に転じ、瀬戸におけるノベルティ生産は大きな打撃を受けた。また、アジア新興窯業地の台頭や世界的な焼き物需要の伸び悩みという背景もあり、ノベルティの生産は衰退の一途をたどった。現在では10社ばかりの工場が残るのみとなっており、その存続はまさに危機に瀕している。

このように、瀬戸のノベルティ産業はわずか百年の間に急速に成立、発展そして衰退を迎えた。瀬戸は日本の近代陶磁器産業を語るうえでの重要な地であり、その中でノベルティが瀬戸の発展に果たした役割は大きい。今後も産業として生き残り、関連資料の保存や研究が進むことで、「せともの」の主役の一つとして「瀬戸ノベルティ」の存在を多くの方に知ってもらいたいと思う。(海塚 有理)



農夫人形

輸出不振後、国内に目を向けギフト商品を中心とした内需拡大を目指したが、バブル崩壊もあり高級ノベルティの生産は間もなく衰退した。掲載資料は1990年代に製造された廉価な商品である。

【参考文献】

- ・田村哲「魅惑の陶製人形～ノベルティ、人物備、はにわ、土人形、フィギュリン～」(『魅惑の陶製人形 = The charm of the ceramic dolls : ノベルティ、人物備、はにわ、土人形、フィギュリン』愛知県陶磁美術館、2014)
- ・中村儀朋「輸出陶磁の華・幻の瀬戸ノベルティ～いま、目覚める“愛とほほえみの造形”～」(『陶説』第736号、日本陶磁協会、2014)
- ・大森一宏「瀬戸における人形・玩具生産の歴史的展開」(『かたち・あそび : 日本人形玩具学会会誌』通号 8、日本人形玩具学会事務局、1997)

学芸員養成課程選択科目 (博物館学特説Ⅱ)の村絵図展示

吉田 優 (明治大学文学部准教授)

1 展示の経過とコンセプト

これまで明治大学学芸員養成課程は、明治大学博物館とのコラボレーション展示を3回行いました。第1回は「オーソドックスな古文書展示」(2013年)、第2回は「オーソドックスな古文書展示 続編」(2014年)、そして今年度の第3回は「絵図にあらわれる村の景観と生活」をテーマとして2015年5月23日から6月28日まで実施しました。

第1回の展示コンセプト

古文書は、過去に生きた私たち日本人の歴史的連続性を知る上での資料です。古文書は全国至るところに残され、名も知れずこの世を去った人々にも豊かな歴史があったことを知ることができます。例えば、江戸時代生まれの曾祖父、明治時代生まれの祖父、大正時代生まれの父、親から私たちに連続する具体性を帯びた歴史を教えてください(本誌62号参照)。

第2回の展示コンセプト

地域博物館には基本的に古文書が必ず所蔵されています。現実的には、村役人の土蔵のなかに小さな筆筒や長持のなかに雑然とおさめられています。地域の人々の眼差しで地域史を描くことが、地域の古文書の体系をつくるのです。養成課程の学生の感性を生かし、神奈川県津久井地方を中心とした生活誌展示を行いました。

地域博物館の学芸員は、専門を問わず日常業務として、地域の眼差しを持って古文書を調査・研究・展示することが重要です。21世紀の地域博物館における課題です。

第3回の展示コンセプト

明治大学博物館所蔵の江戸時代の村絵図を中心に取り上げます。江戸時代の農村に関する研究は、明治大学木村礎研究室が長きにわたり調査・研究してきたテーマです。木村礎は1960年代から、戦後歴史学の方法に物足りなさを表明していました。1970年代からは江戸時代の村絵図を中心とした農村の景観と生活の研究に本格的に取り組んでいきました。この展示では、絵図に描かれた景観とそこから読み取れる生活について、大学生の目線を重視して構成しました。

2 村絵図の村とは何か

村単位の地域の資料をどのように調査・研究・展示してゆくかは、21世紀の地域博物館における課題と前述しました。なぜなのか。村は一つの時代だけの問題ではないのです。本来これは、日本歴史の基底部を貫通する問題であり、考古時代より現代に至る無名の無数の生活者についての問題とされています。

農業経済学者の小野武夫は、日本の村の構成を①開発新田村、②隠遁百姓村、③寺百姓村、④豪族屋敷村、⑤名田百姓村、⑥古代成立農村、と分

類しました。村の景観を構成する種類としては、山方村落=山間村落、里方村落=平坦地村落、浦方村落=海岸村落と分類しました。

村の形状としては以下、次の通りです。「沿道村落」=道路又は河川に沿って建てられた、多くは長く狭き村。後に町や市となる可能性をもっています。「環状村落」=神社または仏閣を中心として成立する村です。「階段村落」=山の多い地方で、勾配の急な海岸村・水害の多い村が山腹に建てた村です。「参雑村落」=最も普通の日本村落。山間地・海岸地を問わず同一稼業に従事する百姓が集まって作った村です。「散居村落」=人家がここかしこに点在する村です。「田所村落」=一豪家の周囲に小百姓の居住する村です。

更に村の社会生活を考えるうえでは、疎居的村落か密居的村落かを考えることが必要です。

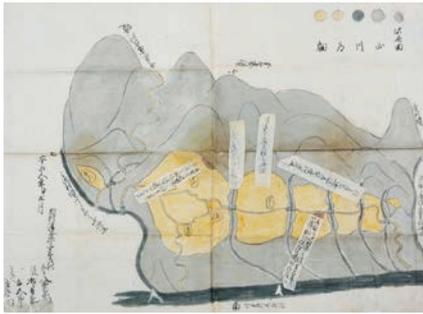
このような定義を頭に入れておくことが重要です。

3 おもしろかった村を 定点観測

千木良村の絵図



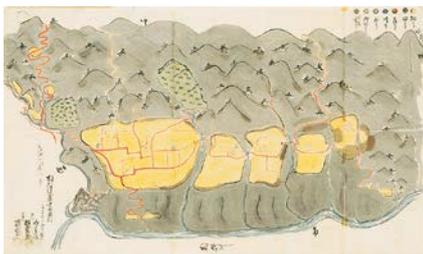
宝暦10(1760)年



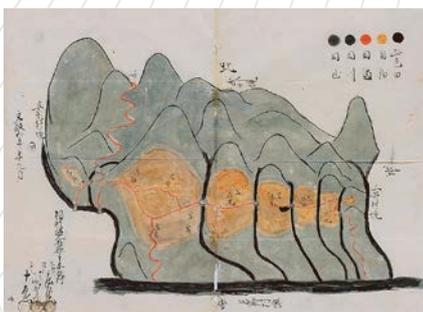
安永5(1776)年



天明8(1788)年



文化11(1814)年



文政5(1822)年



天保9(1838)年

今回のメイン展示のひとつとして、津久井郡千木良村の宝暦10年・安永年間・天明8年・文化11年・文政5年・天保9年の6枚の絵図を取り上げ展示・解説を実施しました。

村を開発する契機は、西洋も日本も、1に水、2に仕事のできる土地、3に開発者の忍耐です。こうした条件によって千木良村も開発されました。

神奈川県津久井郡は県の西北部にあり、東京都と山梨県に接している。地形的には関東山地南縁と丹沢山塊の一部に属し周囲約72キロメートル、面積238平方キロメートルの三角形の地勢を作っている。津久井郡を西南に貫流する相模川は他のいくつかの支流、沢井川、秋山川、道志川、串川とともに河岸段丘をつくり、そこに主要な集落と耕地が立地している(木村礎編『封建村落』昭和33年)。

江戸時代の津久井は明らかに畑作農村であった。また生業補充的な意味で養蚕、山稼ぎ、川稼ぎをおこなった。千木良村は村高480石の中規模な村であった。小名集落として、赤馬、宿村、中村、西、原、底沢の6字があった。これらの小名が、村の中の小地域単位であり、小集落の所在地である(木村礎『日本村落史』昭和53年)。

千木良村の絵図について、受講生の展示解説パネルでは次のように表現しています。

1人目は「山へ向かうつづら折の道や村を通る横ばいの道から、この付近は坂の多い土地なのであろう。(中略)畑が耕地のほとんどを占める中、二ヶ所のわずかな田がある。この田には三年に一度畑にするとの注意書きがあり、水の便が悪かったのだろう。また村を縦に分割する川の両脇は險阻であると但し書きがある」と、千木良村の全体的な村落景観を描写しています。

2人目は「彩色豊かな地図であ

る。はっきりと赤く示された道は急勾配とおもわれる山を登るため、つづら折りだ。ところどころに配されている橋は細かく描かれており、村の生活にとって大切なものなのだろう。一ヶ所だけ橋のない川があるが、ここには水量が少なく、小さな川だったのであろうか。(後略)」と、的確に千木良村の細部景観が捉えられている叙述です。

3人目は「宝暦には描かれていなかった田が、天明には二カ所になっている。しかし、この絵図では、一カ所に減ってしまった。ももとの田の少なさを考えると、その地に田を開く特別な意味があったのだろうか。天保の絵図によると近くに『明神』がある」と、高尾山の西、相模川の急峻な崖の上に立地した村の様子を叙述しています。

おわりに

定期的に展示巡回していると、その度に、展示で用いた吉田東伍の解説パネルの前で年配の観覧者が手帳にメモをしている姿を目にします。いかに東伍の叙述が端的で注目度が高いかを表した光景であり、この観覧者を惹き付ける東伍の描写の妙は、展示解説の在り方の一端を垣間見たような気がしました。

今回の受講生は、矢澤真理子(文学部史学地理学科日本史学専攻)、鈴木三美子(同)、木村仁美(文学部心理社会学科臨床心理学専攻)の3人です。また、いつもながら博物館の外山徹氏と海塚有理氏には大変なご協力を受け、厚くお礼申し上げます。

今回のコラボレーション展示も期間中多くの方が来場してくださり、アンケートにもご協力いただきました。末尾ながら感謝申し上げます。

後期旧石器時代の黒曜石利用と 中部高地黒曜石原産地の土地利用(1)

島田 和高 (考古部門学芸員)

1.はじめに

1970年代前半にはじまる日本の黒曜石産地分析は中部・関東地方の後期旧石器時代人が、現在は森林に覆われている長野県霧ヶ峰と八ヶ岳に立地する中部高地黒曜石原産地を集中的に利用していたことを明らかにしている。ここに紹介する研究は、後期旧石器時代(約38-15 ka cal BP:ka=1,000年前、cal BP=¹⁴C校正年代)における黒

曜石利用と中高地黒曜石原産地の土地利用に関する歴史の変遷の復元である。中部高地の原産地は標高1,200~2,000mに位置することから、黒曜石獲得に関わる人類活動は、現在とは異なる最終氷期の中部高地の景観から大きな影響を受けていたと考えられる。したがって、中部高地における先史土地利用の変遷を理解することは、最終氷期最盛期(LGM)を含む古気候の変化に対する人類適応について有益な情報を提供するだろう。

2.分析対象

本研究の目的を達成するために、黒曜石産地分析、考古編年そして古気候編年からなる3種類の時系列データセットを整備し相関を検討する。時系列データセットは、1)黒曜石原産地を利用する頻度の変化を表す中部・関東地方における後期旧石器黒曜石利用の全体図、2)石器群分布変化を復元するための中部高地の後期旧石器時代編年、そして3)中部高地原産地付近の森林限界の動きに焦点を当てた最終氷期にさかのぼる花粉記録からなる。

(1) 地理的枠組み

図1は、本論が対象とする黒曜石原産地と石器群の地理的な枠組みである。産地分析結果と原産地の対応は、中部高地、神津島、箱根、天城、高原山の6大枠で区分する。図中の黒点は黒曜石産地分析が行われた石器群の分布を示している。これらの地理的なまとまりから便宜的に後期旧石器時代の居住域を関東北部、関東東部、関東西部、愛鷹・箱根そして野尻湖に区分する。

(2) 年代的枠組み

これらのデータセットをあてはめる年代的枠組みは、図2のとおりである。ここでは、後期旧石器時代を前半期と後半期に区分し、以下、前半期をEUP、後半期をLUPと呼称する。EUPは前期と後期に大別し、LUPは前期、中期、後期に大別する。詳細は省くが、各時期は関東平野を中心とする層位編年をもとに

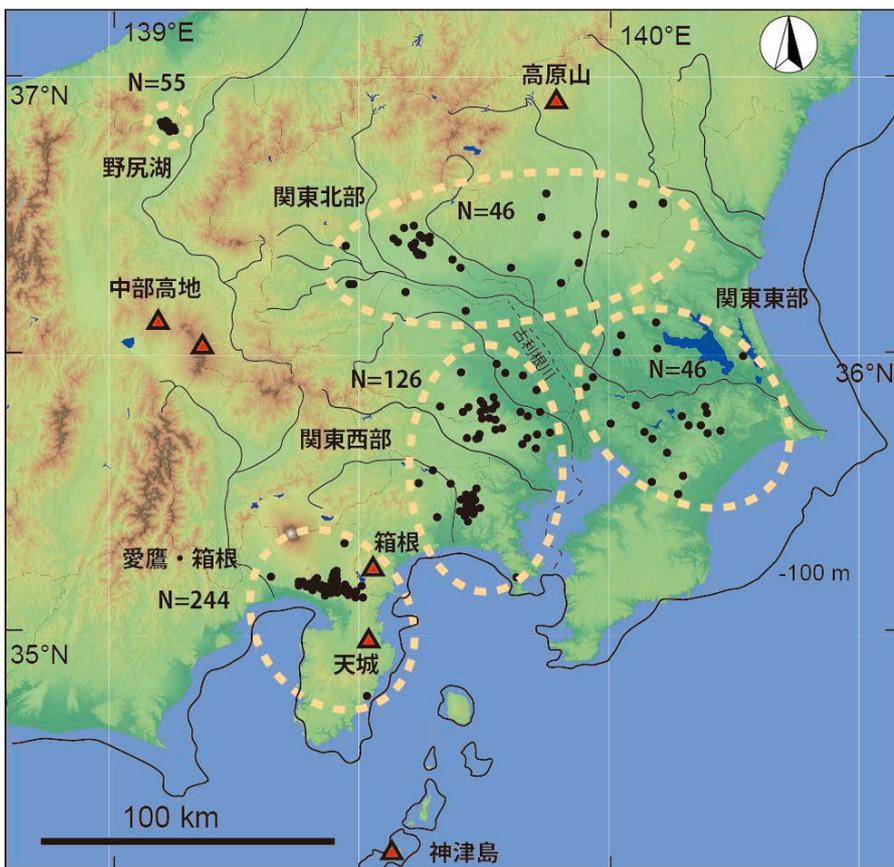


図1 分析対象地域における黒曜石原産地と産地分析された石器群の分布
●:被産地分析石器群、▲:黒曜石原産地(複数の産出地を含む) N:被産地分析石器群の数(一遺跡の複数文化層を含む)

区分しており、中村(2014)にもとづく各時期の継続年代(14C校正年代)を与えることができる。

(3)産地分析データ

黒曜石産地分析データは、芹澤ほか(2011)と谷ほか(2013)をもとに集計した。図2に示したように今回集計した中部・関東地方の黒曜石産地分析データは、517の石器群(1遺跡の複数文化層を含む)から出土した86,523点の黒曜石製石器である。図2には時期別に分析点数を示している。ただし、後期LUPについては同期初頭の稜柱系細石刃石器群のみを対象としている。これらのほとんどは蛍光X線分析法によって得られたデータである。産地分析データは、上述した居住域および時期ごとに集計し、居住地ごとに原産地の利用率を算出する。

(4)考古編年

後期旧石器時代の中部高地編年を構築し石器群分布の変遷を復元するために43の石器群を選定した。これらの石器群は、以下のいずれかの条件を満たすものとした。1)遺跡内で層位的な前後関係を示す、2)¹⁴C年代が得られている、あるいは3)時期決定の指標となるタイプツールないしは石器製作技術を有する石器群である。編年論的検討

にもとづき、図2に時期ごとの石器群の数を示した。中部高地石器群は原産地に近接する石器群と原産地の周辺に分布する石器群で区分し集計してある。

(5)花粉記録

明治大学黒曜石研究センターが実施した中部高地の標高1,400 mに位置する広原(ひろつばら)湿原のボーリング調査によって、30ka以降の更新世から完新世にかけての連続的な花粉記録が原産地周辺ではじめて得られた(Yoshida *et al.* 2015)。30 ka以前の植生データは得られていないが、30.0 kaから17.0 kaの広原湿原周辺は、岩屑流が発達し、ハイマツ、高山草原、シダ類からなる視界が開けた高山帯の植生を示し、森林限界は1000 mから1400 m以下に低下していたと考えられる(phase 1: 図2, Yoshida *et al.* 2015)。氷期と間氷期を区分する酸素同位体ステージ(MIS)では、約30-29 kaを境に、前期EUPから後期EUPがMIS 3に、前・中・後期LUPがMIS 2に相当する(図2)。前者は後者よりも相対的に温暖で、顕著な亜氷期・亜間氷期サイクル(ダンスガード・オシュガー・サイクル)がみられるが、後者は比較的安定した寒冷気候に特長づけられる。LGMはMIS 2

の23-19 ka cal BPとする(図2)。なお、17.0 ka以降、11.2 kaまでのphase 2(図2)には、森林限界は1400 m以上に上昇し、広原湿原周辺はカバノキ属と亜寒帯針葉樹林の混交林の景観へと変化する(Yoshida *et al.* 2015)。

以下、次号において中部・関東地方における黒曜石利用のダイナミックな変遷を軸に、各時系列データセットの相関関係を考察する。

参考文献

- 中村雄紀(2014) 関東地方における旧石器時代の年代と編年. 旧石器研究, 10, 107-127.
日本旧石器学会.
芹澤清八ほか(2011) 石器時代における石材利用の地域相(資料).
日本考古学協会栃木大会2011年度大会発表資料集, 61-268
谷 和隆ほか(2013) 中部地方の黒曜石原産地分析資料. 日本考古学協会2013年度長野大会研究発表資料, 63-174.
Yoshida, A., Kudo, Y., Shimada, K., Hashizume, J. and Ono, A. (2015) Impact of landscape changes on obsidian exploitation since the Paleolithic in the central highland of Japan. *Vegetation History and Archaeobotany*, doi:10.1007/s00334-015-0534-y.



図2 時系列データセット相互の関係

ためかも知れません。また雑穀は検出されませんでした。しかし板付遺跡の弥生土器が作られた周辺にイネが存在していたことは確実となりました。

福岡県の遠賀川に近い城ノ越遺跡は弥生時代前期から中期の時間幅をもつ貝塚遺跡で、ここの調査ではイネ粃2点、イネ胚乳(玄米)1点、キビ有ふ果1点を同定しました。栽培穀物はイネに特化することなく雑穀も作られていたようです。

大阪市に所在する瓜破遺跡は「畿内第I様式新段階」資料主体の近畿地方の弥生時代前期を代表する遺跡ですが、遠賀川式の甕などからイネ粃16点を同定し、雑穀は未検出でした。

一方京都市に所在する弥生時代中期前半の遺跡である深草遺跡では、イネ粃27点とアワ有ふ果1点を同定しました。このうち甕一個体の底部外面からは穂軸についたままと推定されるイネ粃13点を同定しています(写真4)。

愛知県豊川下流域に点在する稻荷山、大蚊里、五貫森の3遺跡からは縄文時代晩期後半の突帯文土器から弥生時代前期の条痕文土器が出土しています。3遺跡あわせてアワ有ふ果1点、キビ有ふ果5点(写真5~6)、イネ粃1点を同定しました。雑穀は突帯文土器からの、イネは櫛王式~水神平式の条痕文土器からの検出です(写真7)。条痕文土器圏ではかねてから西日本の遠賀川系土器圏とは一線を画す「縄文系弥生文化」(設楽2000)が予測されてきました。またこれまで東日本では西日本と比べて遅れて農耕が開始されると考えられてきました。しかし突帯文土器から検出された栽培穀物からは、少なくとも穀物栽培情報は意外に早く、西日本とそれほどの時間差なく東海地方まで到達していたようです。

一方で名古屋市西志賀遺跡は弥生時代前期から中期の時間幅を持ち、そのうち資料の主体となるのは前期遠賀川系土器で、わずかに条痕文土器が伴います。ここからはイネ粃46点、イネ胚乳2点、キビ有ふ果1点を同定しました。そし

てイネは遠賀川系だけでなく条痕文土器からも検出していますので、必ずしも遠賀川系がイネで条痕文系が雑穀という単純な栽培内容ではなさそうです。

伊豆七島の新島田原遺跡でも、縄文時代晩期末から弥生時代中期の出土土器を調査して、イネ粃4点、アワ有ふ果10点、キビ有ふ果13点、キビ穎果2点を同定しました。縄文晩期末に中部高地を中心に広く分布する浮線文水I式土器からもキビ3点(写真8)を同定しており、栽培穀物情報はすでに伊豆七島まで到達していたようです。

茨城県霞ヶ浦の殿内遺跡、栃木県佐野市の出流原遺跡、千葉県佐倉市の岩名天神前遺跡は、弥生時代前期から中期の再葬墓遺跡です。今回いずれの出土資料からもイネと雑穀を同定し、関東地方の再葬墓集団がすでに、イネと雑穀がセットとなった穀物栽培を開始していたことが明らかとなりました。

レプリカ法の可能性

明治大学博物館が所蔵する12遺跡出土資料のレプリカ法調査で同定された栽培穀物から、日本列島の農耕開始期について考えてきました。今回の調査結果からは、農耕情報はそれほど大きな時間差なく東日本にも到達していたようです。また弥生農耕といえどどうしても稲作に関心が集まりがちですが、東日本ではアワやキビの雑穀も重要な栽培穀物だったようです。いずれにしても日本列島の初期農耕は自然環境や社会的背景など各地の様々な事情から多様性を持って展開していたと思われます。もちろん栽培穀物だけから農耕開始期を議論することは出来ません。また土器圧痕は非常に限られたチャンスでのみ土器に残されると予測されるため、レプリカ法データが必ずしもその遺跡の栽培穀物の全体像を反映しているとも思われません。今後もレプリカ法を含めた様々なアプローチから農耕開始を検討して行く必要があるでしょう。

参考文献

- 丑野 毅・田川裕美1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24 日本文化財科学学会
- 設楽博己2000「縄文系弥生文化の構想」『考古学研究』47-1考古学研究会



写真4 深草遺跡出土土器底部外面からイネ粃13点を同定

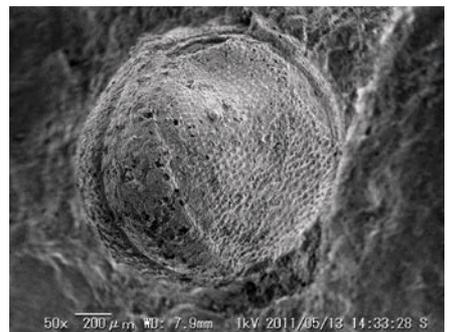


写真5 稲荷山遺跡出土の突帯文土器から同定したアワ有ふ果

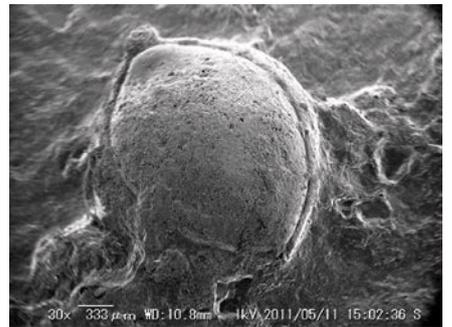


写真6 五貫森遺跡出土の突帯文土器から同定したキビ有ふ果



写真7 五貫森遺跡出土の条痕文土器のイネ胚乳

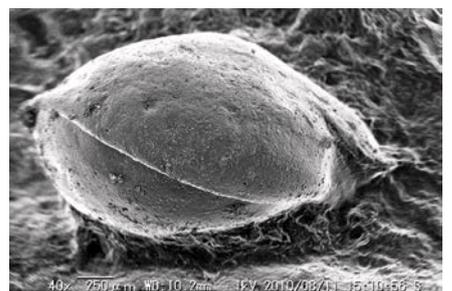


写真8 田原遺跡出土の水I式土器から同定したキビ有ふ果

展覧会の報告

失われた街が語りかけるもの ～リアス・アーク美術館 東日本大震災と津波の記録～ が開催されました

東日本大震災被災地支援の一環として、明治大学震災復興支援センターとの共催で宮城県気仙沼市のリアス・アーク美術館が所蔵する震災記録写真を展示しました(2月23日～3月26日)。27日間の会期中1,925名の方々にご覧いただきました。

リアス・アーク美術館では、2011年3月11日に発生した震災と津波による被害を地域の重要な歴史・文化的記憶と位置付け、発生直後から被災状況を調査・記録、被災物を収集し、その成果は常設展「東日本大震災の記録と津波の災害史」として公開されています。同館における展示の特徴は、被災状況を画像で示すだけでなく、写真展の解説文としては長文である200字弱の文章が1点ごとに付されていることです。知らない人間が廃墟の様子を見てもそこで起きていることの本当の意味を知ることはできないのです。それには建物の崩壊という現象を見るばかりではなく、その街、その場にあった人々の暮らしを想起する必要があります。この“語り”によって、写真に命が吹き込まれると言えます。



展示風景

2月21日(土)には同館の山内宏泰学芸員による記念講演会「まちの記憶・震災の記憶／記録と表現について～リアス・アーク美術館の試み～」が開催されました。印象的だったのは、津波は単なる自然現象であり、人間の生活との関わりで災害になるという指摘でした。その意味で津波もまた被災地の文化を構成する要素であること、文化財とは記憶の表現物であり、そのリレーによって文化は継承される。この震災の記録を、地域文化を再認識する機会にしたいという趣旨でした。いつの日か、被災地の瓦礫は撤去され街が再生される日が来るとしても、あの日あの時に断絶した、それ以前の、そこで営まれていた人々の生活のあり様を想起することはできるのか?本展に出版された写真とその解説文はその記憶を記録する瞬間的な機会であったと言えます。

第2回全国大学史展「学生たちの戦前・戦中・戦後」 が開催されました

明治大学史資料センター



入口の様子

2015年7月3日(金)から8月2日(日)まで、全国大学史資料協議会東日本部会(以下東日本部会)と明治大学史資料センターとの共催で、博物館特別展示室にて本展示を開催しました。東日本部会は、大学の歴史資料を取り扱うセクションおよび個人で構成されています。会員を中心にその所蔵資料を一堂に会した本展示は、2010年に開催した第1回全国大学史展「日本の大学—その設立と社会—」に続く2度目となります。

今回は「学生たちの戦前・戦中・戦後」をテーマに、大学の中心的存在である学生たちの歴史を、第一次大戦後から戦後高度成長期までにかけて取り上げました。展示構成は「Ⅰ 戦前の学生たち」「Ⅱ 戦中の学生たち」「Ⅲ 戦後の学生たち」「Ⅳ 写真でみる学生生活」の4章立てです。Ⅰでは、第一次大戦後の大学増設にともない増加・活発化した学生活動を示す資料、Ⅱでは戦時下における大学の変貌や学徒動員等の資料、Ⅲにおいては、戦後の混乱をへて高度経済成長期を迎え多様化していく学生の一端を示す資料、Ⅳでは各大学所蔵の卒業アルバムに残る都内名所旧跡と学園祭の写真資料を中心に展示しました。また、今回は新しい試みとして映像資料コーナーを設け、昭和初期から1960年代までの大学関係映像を上映しました。資料点数としては、70近い大学・機関および個人の所蔵する資料約300点(現物資料約100点・写真資料200点)を展示することができました。



展示風景

今年は戦後70年ということもあって、戦中資料を中心に注目が集まり、NHK首都圏ネットワーク(7月7日)、朝日新聞(7月14日・8月1日)、毎日新聞(7月31日)をはじめ各種マスメディアで紹介を受けました。会期中の来場者はおよそ2,600名となりました。東日本部会と大学史資料センターは今後も展示などを通して大学史資料の魅力と意義を伝えていきたいと考えています。

公開講座考古学ゼミナール のご紹介

当館が企画し、明治大学リバティアカデミーにおいて開講している博物館公開講座「考古学ゼミナール」は、1987年の第1回から今年で28年、回数にして56回を数える伝統ある講座です。今年度は、明治大学の文学部考古学専攻(考古学研究室)開設65周年を迎えたことを記念し、当時の教員であった後藤守一氏(1888-1960)と杉原荘介氏(1913-1983)という2人の研究者と明治大学の考古学研究に焦点を当てたシリーズを企画しました。第56回にあたる春期は、「杉原荘介と明治大学の考古学研究」と題し、「明大考古学」の発掘と研究を強力に牽引した杉原荘介氏について、静岡県登呂遺跡や群馬県岩宿遺跡の発掘調査と、地元でもある千葉県市川市における縄文貝塚の調査と保存、そして農耕社会の成立をはじめとする弥生時代研究への貢献について、魅力的な人物像やエピソードを交えつつ紹介しました。10月に開講する第57回の秋期講座では、「後藤守一と明治大学の古墳研究」として、初代教授であり戦前から戦後の古墳研究を牽引した後藤守一氏の研究と、その後を引き継いだ大塚初重氏や小林三郎氏による東日本の出現期から終末期に至る東国の古墳研究の歩みと、現在の考古学専攻が取り組んでいる信州や常陸を中心とした発掘調査・研究を紹介します。



後藤守一氏(左)と杉原荘介氏(明治大学博物館蔵)

図書室から



図書室通信では、博物館併設の図書室に関することや図書についてご紹介します。今回は、日本十進分類法についてとりあげます。

みなさんは、「日本十進分類法」という言葉を聞いたことがあるでしょうか？図書館の本は全て日本十進分類法(NDC)という方式に基づいて分類されています。1929年にできた分類法で、一定の体系に沿って配列し、多数の図書の中から特定の図書を探しやすいように作成されました。書名・著者・出版年・形態などの書誌要素、各図書の持つ情報内容に着目して分類されています。

分類は①第1次区分表(類目表)、②第2次区分表(網目表)、③第3次区分表(要目表)、④細目表という4段階に分けられます。博物館図書室の図書も日本十進分類法に基づいて分けられています。博物館図書室に多く所蔵されている発掘調査報告書を例に分類に注目してみましょう。

発掘調査報告書『山王山遺跡』のラベル1段目には、213.6という数字が書かれています。この数字の意味は、①類目表「2」→歴史 ②網目表「21」→歴史-日本史 ③要目表「213」→歴史-日本史-関東地方 ④細目表「213.6」→歴史-日本史-関東地方-東京都 となり、分類が細かくなっていくことでより詳しい意味になっていきます。この請求番号「213.6」の意味は、「歴史の中のうち日本史で、地域は関東地方の東京」となります。地域が違くと③と④が異なっていきます。

分類記号があることで本を検索して探す際に分かりやすくなるので、とても重要なものです。普段何気なく見ていた請求番号でも、意味が分かると面白いですね。地域以外の分類についてもぜひご自身で調べてみてはいかがでしょうか。

日本十進分類法(歴史区分の一部)

例：『山王山遺跡』 H213.6

①類目表

2 歴史

②網目表

21 日本史
22 アジア史、東洋史
23 ヨーロッパ史、西洋史
⋮

③要目表

211 北海道地方
212 東北地方
213 関東地方
⋮

④細目表

213.1 茨城県
213.2 栃木県
213.3 群馬県
213.4 埼玉県
213.5 千葉県
213.6 東京都
⋮

参考文献
もり・きよし 1988 『日本十進分類法 新訂9版 本表編』
社団法人 日本図書館協会

去る5月18日、今年度で第2期3ヶ年の3年目を迎えている南山大学人類学博物館との交流事業について、次の第3期事業の企画について話し合いが持たれました。第1期においては博物館資料論のシンポジウム開催と成果刊行物の出版、両館の収蔵資料をテーマとする東京・名古屋における展覧会開催。第2期においては一般向け公開講座と在学生向けの特別講義の実施にあたり、そのテーマとなる収蔵資料の実物を交換展示するという趣旨で交流事業がおこなわれてきました。

第3期は博物館における教育普及活動について、これまでのオーソドックスな枠組を根本から見直すような、博物館教育論としてももっと実験的な試みをおこなうことが提案されました。収蔵品個々の学術専門分野に収まる個別具体的な知識を提供するという方法ではなく、博物館の資料として、もっと大きな枠組みでの活用ができないか、両館が所蔵するバラエティに富んだ収蔵資料相互を有機的に結びつけた活用。遙か昔から、また、世界各地から、あるいは比較的近年のもの、身近にあったものでも忘れ去られがちなものまで…、モノとして我々の許に遺された様々な資料が生き生きとその存在感を示すことができるようにするには、どのような方法があるのか?引き続き検討を重ねてゆきます。

2015年度事業 収蔵資料交換展示 好評開催中!

パプアニューギニアの海にまつわる民俗誌資料が印象的!

南島との出会い～今泉コレクションにみる民族造形美術品

会期：9月26日(土)～10月25日(日)

会場：常設展示室(明治大学アカデミーコモン地下2階)

ギャラリートーク「オセアニアの不思議なモノたち」

講師：如法寺慶大(南山大学人類学博物館学芸員)

日時：10月10日(土) 15:00～16:10

会場：博物館教室(明治大学アカデミーコモン地下1F)

※参加費無料・申込不要



サメ漁の道具(左)とマランガン(葬送儀礼)のマスク

刑事博物館設立の原点に迫る!

江戸の刑罰一応報的刑罰論の超克を目指して

会期：9月26日(土)～10月24日(土)

会場：南山大学人類学博物館

住所：名古屋市昭和区山里町18 R棟地階 電話：052-832-3147

※詳細はポスター・パンフレットをご覧ください



常設展示の改修と期間中のご見学について

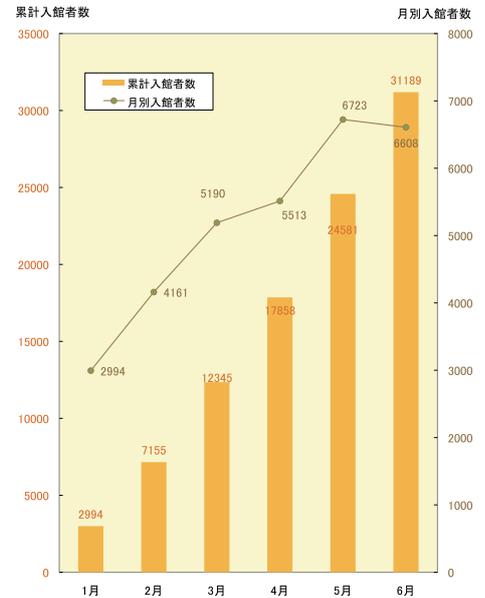
今年度は例年秋に実施されていた特別展に代えて常設展示の改修をおこないます。2004年の新規開館から10年余りが過ぎました。10年ひと昔と言われます。この間にも着々と学術研究は進捗し、また、博物館における研究活動においても成果が積み重ねられてきました。それらを展示に反映するため、解説文・グラフィックを全面的に更新し、一部展示資料を入れ替えます。工事は年明け2016年の1月から3月にかけて実施しますが、改修箇所の限定的な閉鎖に止め展示室は継続して開室します。展示の閉鎖状況につきましては、予定が決まり次第ホームページ上に告知いたしますので、ご来館の折にはご確認ください。

博物館入館者数の動き (2015年1月～6月：延べ人数)

2004年4月以降の
総入館者数累計 **731,494人**

1月～6月	延べ人数
図書室利用者数	2,343
教室等利用者数	1,818

特別展来場者内訳		開催日数	来場者数
2/23～3/26	失われた街が語りかけるもの ～リアス・アーク美術館 東日本大震災と津波の記録～	28日間	1,925
4/4～5/17	新収蔵・収蔵資料展2015	44日間	2,655
5/23～6/28	絵図にあらわれる村の景観と生活	51日間	2,522



団体見学の記録 2015年1月～6月

※事前に見学のお申し込みをいただいた団体のみ掲載しております。

- 【一般】** 寺井グループ(13名)／歴史を学ぶ会(23名)／事例研修の会(15名)／玄暉会(30名)／遊学舎クラブ(YGC)(17名)／ぶらり会(13名)／水戸ロータリークラブ(24名)／NHK旧友会ハイキング部(12名)／埼玉滋賀県人会(25名)／君津市周西公民館(15名)／明治大学学生赤十字奉仕団OB会 0.5次会(15名)／明治大学校友会多摩支部 東久留米地域支部(10名)／エコマインド05(11名)／SBS学苑(27名)／キャプラン株式会社 Jプレゼンスアカデミー(17名)／パナソニック電工 松寿会(34名)／卯月会(22名)／永楽会(17名)／千代田ディスカバリーミュージアム(28名)／みなとの女性史研究会(17名)／ゆうゆうクラブ(12名)／元気に100歳クラブ「日だまり」(21名)／曙町2丁目西町会(25名)／堀切中学校同窓会 江戸歴史散歩会(37名)／事象研究24(15名)／ベストリハ高田馬場(20名)／中央警務隊(35名)／埼玉県立和光国際高等学校PTA(84名)／飯能市双柳公民館(33名)／日立マクセル株式会社 社友クラブ 関東の会(17名)／小平図書館 友の会(17名)／明治大学附属明治中学校PTA(20名)
- 【小・中学校】** 中野区立北中野中学校(33名)／江東区立第二亀戸中学校(15名)／葛飾区立一ノ台中学校(16名)／長野県長和町中学生(20名)／日の出学園中学校(110名)／明治大学附属中野八王子中学校 第2学年(162名)／苫小牧市立凌雲中学校 3年生(35名)／山辺中学校(5名)／山形市立第四中学校 3年生(36名)／愛知県あま市立七宝中学校(24名)／御茶ノ水小学校(90名)／東京都立小石川中等教育学校(16名)／愛知県東海市立名和中学校 第3学年(7名)
- 【高等学校】** 錦城高等学校 新聞部(3名)／二松學舎大学附属高等学校(37名)／和光高等学校 古代史研究(23名)／埼玉県立朝霞高等学校(8名)／山脇学園高等学校(91名)／和洋九段女子高等学校 2年生(22名)／岡山県立井原高等学校(80名)／茗溪学園高等学校(12名)
- 【大学・大学院・専門学校】** ISIランゲージスクール(33名)／共立財団日語学院(17名)／明治大学公認サークル「戦史研究会」(7名)／明治大学文学部(60名)／埼玉学園大学(11名)

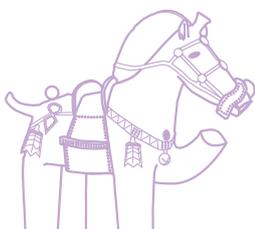
M2 カタログ

大人気!「古墳Tシャツ」が新色にて再登場!!

好評のうちに完売した玉里舟塚古墳Tシャツが色をチャコールグレーに一新して絶賛販売中です。今回は来館者の声を参考に、女性にも丁度良いSサイズの取り扱いを始め、S・M・L三種のサイズを取り揃えました。その他にも当館では魅力あふれるグッズを販売しています。展示鑑賞だけではもったいない! 来館の記念にぜひミュージアムショップ「M2」へお立ち寄りください。



価格:S・M・L全て1,100円



M2ショップ 売上トップ3(2015年1月～7月)

1位	ふせん内藤家(兎)	100円
2位	ふせん内藤家(翁)	100円
3位	ボールペン(土偶)	300円

博物館友の会活動の紹介

明治大学博物館友の会は、博物館のサポートとより良い生涯学習を願う人の集まりです。2015年8月末現在470名余の会員を擁し、各種活動を活発に行っています。今回は活動の一つである友の会主催行事について紹介いたします。

■友の会主催行事について

主な主催行事として、講演会、見学会、会員の発表会等を実施しています。行事への参加は会員のみならず一般の方も自由に参加できます。

■講演会について

講演会は年間8~9回実施しています。シリーズとして「古代史講演会」年間3回、「日本考古学20〇〇」年間1回、「近世講演会」年間2~3回等を実施しています。会員の特典として友の会主催講演会には全て無料で参加できます。2015年10月以降の講演会の予定は下記の通りです。(変更がある場合があります)

2015年 10月 31日(土)	民俗学講演会	講師：赤坂 憲雄氏(学習院大学大学院教授)
12月 2日(水)	古代史講演会	講師：佐藤 由紀男氏(岩手大学教授)
12月 19日(土)	近世講演会	講師：久留島 浩氏(国立歴史民俗博物館館長)
2016年 3月 12日(土)	近世講演会	講師：金子 拓氏(東大史料編纂所)
3月	古代史講演会	講師：未定

■見学会について

見学会は年間4~5回実施しています。「宿泊を伴う見学会」年間1~2回、「会員による地元見学会」年間2~3回等を実施しています。友の会主催の見学会は毎回明治大学博物館学芸員が同行し、全国で調査・研究を推進している明治大学OBのネットワークのご協力を得て、地元講師による説明を受けられるのが特徴です。

2015年11月以降の見学会予定は下記の通りです。(変更がある場合があります)

2015年11月20日(金)~22日(日)「美濃焼・美濃紙の里と周辺古墳」を訪れる

■友の会への入会申込方法■

詳しくは明治大学博物館に備えつけの「入会のご案内」をご参照、または明治大学博物館友の会連絡先へ「入会のご案内」をご請求ください。

【明治大学博物館友の会 連絡先】

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1
明治大学博物館 友の会気付
メールアドレス meihakutomonokai@yahoo.co.jp
※博物館に友の会の担当者は常駐しておりません。
連絡は必ずハガキまたはメールでお願いします。

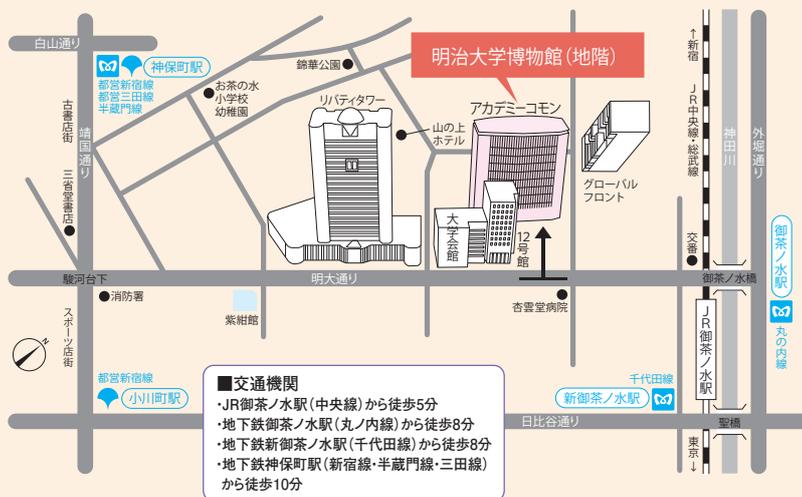
博物館案内

博物館案内

- ◆開館時間
10:00~17:00(入館16:30まで)
- ◆休館日
夏季休業日(8/10~8/16)
冬季休業日(12/26~1/7)
8月の土・日に臨時休館があります。
- ◆観覧料
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

図書室ご利用案内

- ◆開室時間
月~土 10:00~16:30
- ◆閉室日
日曜・祝日・大学が定める休日
- ※図書室はどなたでもご利用いただけます。
- ※蔵書は閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



編集後記

入職1年目の私、この編集後記を書く際に、過去のミュージアムアイズを全て見返してみました。本誌の進化と共に、どの号も執筆した職員の工夫や熱意が感じられました。1993年に刊行されたミュージアムアイズ。歴代の職員が書き続け、読んで下さる方がいるからこそ、今号まで続いているのですね。たくさんの方に、改めて感謝の65号です。